この1年 県内'86 ●● 3

美術

個展重視の傾向

団体の迫力

沖縄新象展

稲嶺成祚

異色の団体展二つ

数多くの案内状を前にして、今年は例年以上の団体展、個展が開かれたように思う。チェックしてみると、二十人以上が二回以上の個展を開いている。画廊の企画展などもあってのこととは思うが、それにしても個展の盛んな一年ではあった。

このことは県内のグループ展、中央の支部展など、団体展も盛んに行われはしたが、しだいに個展による発表の方に重きを置いてきたということなのであろう。こうした中で個人の力量も見せながら、団体としての迫力も大いに感じさせたのは、パート1、パート2として二回に分けて展示した沖縄新象展である。各人が百号の作品二点以上を出品して、それぞれの力を十分に示した発表となった。

今年は異色の団体展が二つあった。一つは第十八回九州芸術祭の一環としてのアジア現代美術展。日本をはじめ、東南アジア諸国十三カ国の若手の作家たちの作品が一堂に集められ、それぞれのナショナル的、インターナショナル的問題が示されて興味深かった。

もう一つは、琉球中国交流展である。この展覧会には作品のみならず、中国浙江省の美術代表四人も来県した。陳列された五十点の作品は、中国としてのアイデンティティを保ちながら、いかにして現代美術を確立するか、その模索を感じさせるものであった。沖縄側からも百四人の多人数の出品があり、県民アートギャラリーを埋めた。

個展においては、絵の具と紙やキャンバスといった従来の素材とは異なったものによる表現活動も多く行われた。奥田実の「クレイ・ワーク展」、金城登の「染布個展」、新里義和の「カイ展」、新里義和・金城馨・仲間伸恵の「表面から物質へ展」、山内盛博の「SUKIMA展」、金城馨展、大浜用光展、高橋渉二展、県外発表の豊平ヨシオ展などがそうである。めくるめく色彩のはんらんだった染布展、デリケートな仕事を示した「クレイ・ワーク展」「SUKIMA展」奔放な高橋渉二展などが印象に残った。

見直された〃白黒〃

それほど目立った現象ではないが、色彩を捨てて、白や黒の世界へ移った作家たちもかなりでた。墨象作家の伊江隆人、水墨の奥原崇典、水彩の平良晃らは、これまでも白と黒による表現が主だったが、油彩の永山信春が黒のみの作品による個展を開き、真喜志勉が今年の個展では一層無彩色に徹底し、ウエチヒロが明快な白と黒を試し、喜久村徳男と知名久男が水墨による個展を開き、神山泰治も水墨を試み始めた。白黒の世界をそれぞれの立場から見直し始めたようである。

彫刻においても今年はかなりの収穫だった。能山宗忠が軽妙でペーソスのきいた金属彫刻を発表し、丸山映が視覚の残像現象を巧みに利かした石彫を集め、上江洲由郎がテラゾーによる精ちな仕事と、大石塊による手荒な作品を並べ、具志堅宏清は写実的作品を展示した。

次に印象に残った個展のいくつかについてのべたい。まず金城満個展。赤と緑の原色の対比の中に抽象的形態と具象的空間の混合するユニークな作品を見せた。彼はそうした仕事で今年の県展の優秀賞を受けた。

強烈な人物手法

同じく若手で前田比呂也の絵画展。うらそえ定期美術展として開かれ、ほとんど注目を浴びずに終わったが、その強烈な表現主義的手法による人物像は、見る人に強いショックを与えるものだった。

精密な具象絵画では、インドを描いた永原達郎展、石垣や榕樹などをテーマに大作を並べた与那覇朝大展、水彩に新境地を開いた新城征孝展などがあり、それに庶民の哀歓を歌った金城明一展、奔放な絵づくりを楽しんだ大浜英治展、雑草のバリエーションを展開した宮城孝也展、シュールの世界に古い沖縄のイメージを注いだ仲松清隆展、静謐（ひつ）な大作を並べた永津禎三展、フォービックな浦崎彦志展、久方ぶりに新作を展示した安次嶺金正展などがある。

一人の作家の一生の節々における作品を集めた遺作展は、その人の全作品を展望できる視野の広さと、生きざまの重さを示してくれる。四月に開かれた大嶺信一遺作展には、そうした感慨をもった。

沖展と県展は、沖縄の美術界における大きなイベントではあるが、そのときどきの新聞評がでたので、ここでは省略し、受賞者名のみを記しておきたい。

【沖展】
（絵画） 沖展賞 照屋万理 準会員賞 鎮西公子 下地明増 奨励賞 中島イソ子 山内盛博 大城勝子 島袋喜代子
（彫刻） 準会員賞 友地雪江 喜名盛勝 奨励賞 新垣幸俊 崎枝静子 上江洲由郎

【県展】
知事賞 上江洲由郎
優秀賞 金城満
奨励賞 伊良部恵勝 宮城孝也 金城準子

十数年間、沖縄美術界の顔ともいうべきポジションを占めてきた沖縄物産センター画廊と、沖縄市の新しい拠点をきずくべく期待されていたギャラリー・ビジョンが今年限りで閉鎖されることになり、美術の秋の大きな話題となった。このことも今年の記憶されるべきことであろう。

（琉大教授）